

祈りの類型論とその批判的文脈

—鈴木大拙の神道・国学批判—

黒崎浩行 (國學院大學)

hkuro@kokugakuin.ac.jp

問題の所在

- 宗教理解の出発点としての「祈り」 [島田 2002] [菅原 2005]、宗教間対話の前提としての「祈り」 [棚次 1998:6]。
- 宗教現象学における祈りの類型論:
 - ハイラー(『祈り』): 「生き生きとした祈り／生き生きとしていない祈り」の根本的対比。「宗教的天才の個人の祈り」における「預言者の／神秘主義的」類型…複数の観点からの対比 [宮嶋 2004]。
 - 棚次正和: 〈超越者—自己—世界〉、〈言語主体—言語—言語外現実〉の二種類のトリアードを組み合わせることによる類型 [棚次 1998:249]。
- 現実の祈りの把握にさいしての留保: 祈りの類型論使用の遂行的 per formative な性格。それ自体が祈りの内容の分節化と取捨選択を押し進めていることがある。
- 先行事例において確認する。

鈴木大拙の神道・国学批判における祈りの類型論の使用

「祈りを知らぬ神道」

- 『靈性的日本の建設』(1946) 第一篇「靈性的日本の建設」四「日本的靈性的自覚と神道」3「神道の宗教的検討」の一節。

原始民族の擬似宗教的行事—禊や祓—を、至上命法のやうに心得て、これが日本人の到り得べき最高の精進である如くに心得る神道家が、これで以て国家の経営に当らんとするのであるから、誠に向ふ見ずの限りであったのである。これに連関して彼等は日本人精神の特色を感謝の念におくのである。さうして上代の祝詞には祈願の心がないと云ふのである。彼等は祈願を解して神との間における利益交換の義とする。祈願がなかったと云ふことは、尚大に研究しなければならぬところであるが、祈願の義に至りては、神道家はその本義に徹底して居ないのである。彼等が罪穢の中心問題に触れ得ないと同じ意味において、彼等は祈願を利益交換以外に見得ないのである。彼等が宗教の何ものたるかを知らぬのは、此点でも明白となって居る。宗教を知らず、靈性的自覚を知らぬと云ふだけなら、それきりの話で、只彼等のために悲しんでよいのであるが、その知らざるを誇りとして、その誇りを積極的に政治の上に乱用せんとするとき、神道の危険性が加はるのである。(中略) 祈りを知らぬ感謝は、自我中心の感謝で、私欲の外何ものもない、利益交換と同じである。(中略) 一種の敬虔はある、畏みはある。併しそれだけでは靈性的自覚にはまだまだ遠い、達し得ないものがある。ただの畏みは封建的心理態に外ならぬとも云へる。[後略] [鈴木 1968(1946): 108-109]
- 鈴木による祈りの類型: 「対象的知性的／絶対的靈性的」。
 - 類型を分かつメルクマールは「目的性」の有無。
 - 「絶対的靈性的」な祈り…仏教における菩薩の本願を例示。
- 第二篇「日本的靈性的自覚」では山田孝雄『国史に現れた日本精神』(1941)の祝詞に関する論述を引証。山田の、神と人との間には「親子の間」のような絶対の信頼があるのみとする考えに対し、例えば食物の供給に対する絶対の信頼感のようなものは、人間のみが持ち得る、宗教的な「絶対の憑依」とは次元を異にする、と批判 [鈴木 1968(1946): 183-188]。

同時期の祝詞研究における「祈祷=いのり」・「祈願」・「感謝」

- 白石光邦『祝詞の研究』(1941) …鈴木も別の箇所を参照 [鈴木 1968(1946): 107]。古事記・日本書紀・延喜式祝詞・中臣寿詞に見られる上代の祝詞の本質と発生を、文献考証と宗教民族学等の知見をもとに探究。
- 上古の祝詞は「霊力の呪的転移の信仰」と「言霊信仰」にもとづく呪言から発生。
- 「祈祷」=「いのり」の定義…加藤玄智『神道の宗教学的な新研究』(1935)を援用。以上述べた通り、宗教は即ち超人間的な存在者と、吾々人間とが、人間的に交渉関係することである、[中略] 斯く人が人間的に神と交渉関係を付けようとする要求が、ここに宗教上、幾多の儀礼祭式即ち宗教的儀式 Cults, Ritus, or Religious Ceremony となって表はれ来るのである。而てその中で、特に神人の交渉関係を達成する所の具に供せらるるものは、則ち祈祷 Prayer である。[加藤 1941(1935): 68]
- 「いのり」…祝詞において「呪術を生み出す根本意欲」[白石 1941: 124]。「その意欲を達成せしむる手段として呪言が利用される」[同 127]。
- 「感謝の祝詞」と「祈願の祝詞」…延喜式祝詞では「感謝の祝詞」が古く、「祈願の祝詞」は新しい [同 127, 332]。「感謝の祝詞」は呪的な意義をもつ称名の祝詞とは別個にあったと考える。このことが持つ宗教発達の史的な特異性・優位性を、世界の古代宗教に関する知見と対照しながら強調。吾々の祖先が、斯る上世に於て、而も斯る至純なる感謝の境地に於て神に対し得たことは、これこそ宇内に誇り得べき吾々の一大国民的性格であらねばならぬと思ふのである。[中略] 後世の所謂進歩せる宗教に於てならばいざ知らず、蒙昧な原始宗教に於ては、只能く我々の祖先民族のみが持ち得た神聖なる境地ではあるまいかと思はれる。[白石 1941: 128]。

まとめと課題

- 鈴木は、神道思想が「日本的霊性的自覚」の水準に至っていないことを、祈りの二類型を軸にして論じた。そこでは単に神道における「祈願」が「神人の利益交換」として「対象的知性的」であるということではなく、むしろ神道家・神道研究者が「祈願」を否定し「感謝」に優位性を見ているということに対して批判を展開した。その点において、これは第二次世界大戦後に鈴木が展開した戦争批判・国家主義批判の一環をなしている。
- この時期の鈴木は反戦主義、反国家主義的主張については近年、戦時期における言動とあわせて、その本質的な意義を疑問視する議論がある [末木 2004: 188]。また、近代の神社および神道思想における「祈祷」「祈願」の問題は、鈴木が挙げた学説・思想のレベル以外にも、「神社非宗教」を前提とした神社行政とそれへの神道界の対応をはじめとして、掘り起こすべき事象が沢山あると思われる。それらの検討は今後の課題としたい。

参考文献

- 加藤玄智 1941(初版 1935) 『改訂増補 神道の宗教学的な新研究』 古明地書店。
- 宮嶋俊一 2004 「フリードリッヒ・ハイラーの『祈り』における預言者的／神秘主義的という類型について」『大正大学研究紀要』 89: 223-242。
- シャープ、ロバート・H. 1995 (1993) 「禪と日本のナショナリズム」 菅野統子・大西薫訳、日本仏教研究会編『日本の仏教 4 近世・近代と仏教』 法蔵館、81-108。
- 白石光邦 1941 『祝詞の研究』 至文堂。
- 島田裕巳 2002 『日本人の神はどこにいるか』 筑摩書房。
- 末木文美士 2004 『明治思想家論：近代日本の思想・再考』 トランスビュー。
- 菅原伸郎 2005 『宗教の教科書 12 週』 トランスビュー。
- 鈴木大拙 1968 (1946) 「霊性的日本の建設」『鈴木大拙全集』 9、岩波書店。
- 棚次正和 1998 『宗教の根源：祈りの人間論序説』 世界思想社。